

動物は好きださうか。もしそうなら、動物園に行くのが好きかもしれない。動物園は多くの種類の動物を見せる。そこでそれらを(1)楽しむ。しかし、動物園では他のこともできる。一つは動物の手助けだ。動物園が動物のためにできることについて考えてみよう。

「ジャージー動物園」と呼ばれる動物園がある。他の動物園とは異なっていて、特別な動物を世話するのだ。ある種の動物は自然界では生存の危険にさらされている。だから、世話をしなければ、全て消滅して再び会えることは決してないだろう。消滅しそうなとき、動物園へ連れて行く動物もいる。(2)では生きられな(2)では生きられる動物もいる。2,3年間(2)で生きて赤ん坊を手にした後、(2)へ戻るものもいる。ジャージー動物園はそのような動物を長い間手助けしてきた。

ジェラルド・ダレルはジャージー動物園をつくり、1959年にオープンした。父は技師でありインドで働いていた。ジェラルド・ダレルは1925年にここで生まれ、インドでは初めて動物園へ行きた。動物に興味をもち、3才のとき、彼と家族はインディラントへ戻って行った。インドを去った後、まだ動物が大好きだったが、6才のとき、夢が自身話した。動物園を持つことだ。わが夢にっいて母に話した。20才のとき、家族の支援を受けた。そして、翌年動物園のため、多量の動物を集め始めた。しばらくして動物を集めるのに多量のお金を費やさなければならなかつたのでお金について心配した。

そのとき、作家である兄が、いかに考へて手えたる。本
 を書いて、売ることだ。たか。だか。お金の得る出版
 に本を書き始めて、34才の動物園は他の団体の人々の手
 された。ジャージー動物園の像が門に立っている。その鳥
 を手助けする。鳥の像が門に立っている。その鳥
 はドードーである。ドードーは飛べない大鳥で、英国
 人が1681年に1羽見つけたが、1505年頃に後、だ
 も再び見ている。今では金で買っている。ジャージー動物園
 は動物を手助けしてドードーの問題を再び起こさ
 ないことを望んでいる。この動物園のシンボルを
 知っているだろうか。「d」である。この「d」は「ドードー
 」という単語と「ジャージー・ダレル」の「D」から来
 ている。

ジャージー動物園が助けてきた動物の一例はゴ
 ーデンライオンタマリンドのよな顔周辺に黄金の髪が
 あるからだ。アラジンの森林に住んでいて、多くは死
 常にか多く木を切り倒したときで、なかつた。だ
 しまつた。そこでジャージー動物園に連絡して来ら
 人坊を手にした。他の動物園では、赤人坊も手
 入本世界に多く存在する。

ジャージー動物園では、来園者に動物について来
 教えるプログラムが多くある。動物園の職員は来
 園者に動物と彼らの生活について話す。来園者は

職員の話を聞いて質問することが出来る。これが
その動物園の最もおもしろい点である。ジャージ
ー動物園を訪れる人々は生存の危険にさらされて
いる動物を助けることが出来る動物園があること
を学ぶことが出来るのだ。

キョーコは高校生だ。英語を勉強してオーストラリアの生活様式を学ぶに去年オーストラリアに行った。初めての外国への旅行だった。2週間オーストラリアの家族を(1)。

初日に、キョーコはホストファミリーであるジョン、ヘレン、娘のキャミー、犬のグラッキーと会った。ジョンは高校の美術教師でヘレンは牛学校で数学を教えている。キャミーは大学生だ。コンピュータ工学を研究している。

キャミーはキョーコに家の案内をした。「これがあなたの部屋よ。となりが私のね。これがお風呂よ。使わないときはドアを開けたままにしておいてね。私たちは普段そうしているから。彼女が言ってきた。「わかりました。いっお風呂に入ることもできますか。」キョーコは尋ねた。「いつでもいいわ。私たちは普段朝にシャワーを浴びるわ。」キャミーは言った。

キャミーは毎朝グラッキーを散歩に連れ出す。キャミーは母が料理するときに手伝う。キャミーは家の掃除する。ジョンが夕食後に皿を洗って、そののを見てキョーコはとても驚いた。キャミーの家では、皆が家族のために(3)する。キョーコはこれがオーストラリアの習慣だと思った。「そして、グラッキーは夜に家族を見張っている。」キョーコは思った。

その家族はキョーコの学校近くに住んでいたので、毎日歩いて学校へ行った。~~時~~ときどき、キャミーとグラッキーは朝にキョーコと歩いて学校

へ行く。た。学校へ歩いていきた。とき、キヤシ-は英業
 英語にっいた。の質問に答えた。授えよした。と
 うとし、キヨ-コが英語を練習で夢にっいて話すこと
 かある日、キヨ-コへシキヨ-コです。日本の夢はと会うこと
 になっ彼を助けた。キヨ-コです。私の夢はと会うこと
 して彼の名前は旅行中クルアスメントは彼の
 「私の英語勤めは続けた。クルアスメントは彼の
 し人だ。ある晩、キヤシ-はキヨ-コに言っ。「大学に
 は異なる国の生徒がわ。研究してさ。大学へ行く(5)が
 出身の友達ユ-クを研究してさ。大学へ行く(5)が
 コンビ-てみなせ。」「よさ。」「キヨ-コが言っ。「心配しな
 会っ。」「よ。」「分。」「放課後、キヨ-コはバスに乗っ。大
 簡単よ。」「シ-がな。」「景シ-はキヨ-コはバスに乗っ。大
 次で。」「キ-の。」「景シ-はキヨ-コはバスに乗っ。大
 学かえ。」「た。」「景シ-はキヨ-コはバスに乗っ。大
 見か。」「た。」「景シ-はキヨ-コはバスに乗っ。大
 な。」「た。」「景シ-はキヨ-コはバスに乗っ。大
 ヤシ-はキヨ-コはバスに乗っ。大

コンピュータールームへ来た。どの生徒も静かに熱心に勉強していた。キャミーが一人の少女に誇し外へ行った。名前は一だ、一緒に部屋を出て本をへ行った。空は一人でいて青かった。座った。キョーコは英語で夢について話し始めた。スーは少し驚いた、というの、キョーコがとても上手に英語を話したからだ。「そんなに上手に英語を話すのどこで学んだの。」(6)。「キャミーとお母様がスーを教えた。キャミーはスーにキョーコのスピーチについて話した。キャミーは続けた。「私はコンピューター技術者になつて日本で働きたいわ。スー、あなたはどこう。」「え、わかんないな。でも、英語を話せるところ。」「コンピューターを使うことは今とても重要だと思わ。」

キョーコは賛成して言った。「(7)」